

猪苓湯

(傷寒論・金匱要略)

組成 猪苓3.0、茯苓3.0、沢瀉3.0、阿膠3.0、滑石3.0

主治 水熱互結、湿熱蘊結下焦(血淋)

効能 利水清熱、養陰(止血)

プロフィール

猪苓湯は、『傷寒論』陽明病篇と少陰病篇、『金匱要略』臍腑經絡先後病篇と消渴小便利淋病篇に記載されている処方である。日本では江戸時代の古方派勃興以後に多用されるようになり、幕末の頃には「血尿」、「淋瀝」の処方としてよく知られ、昭和の漢方復興期以降は、膀胱炎の代表処方となった。近年では皮膚疾患や婦人科疾患などにも用いられている。

方解

本方は、下焦において水邪(湿熱邪)と熱邪が結びついた病態に対する処方である。猪苓・沢瀉・茯苓は小便を通利し、滑石は利水清熱・通淋し、阿膠は清熱止血する。利水滲湿薬と清熱滋陰薬の配合により、利水しても傷陰しないように工夫されており、水邪と熱邪を同時に清することができる。

四診上の特徴

猪苓湯の使用目標について、矢数は、「脈浮、小便不利、淋瀝痛または小便難、あるいは心煩、渴を目標とする。心煩は(略)神経症状も含まれる。腹証は下腹部に緊満の傾向がある。」としている¹⁾。口渴と小便が出にくいことが目標となるため、五苓散との鑑別が必要になる。小倉は、「猪苓湯は渴が五苓散より強く、不眠や血尿、小便が出渋るような症状がみられやすく、一方五苓散では嘔吐や発汗、頭痛、浮腫、目眩がみられやすい」と記述している^{1)、2)}。

中田は、先哲の記載などを参考にして猪苓湯の使用目標を考察し、以下のようにまとめている³⁾。

- ① 下焦、特に泌尿器系の炎症(湿熱下注)。
- ② 自覚的症状としては口渴、小便不利、血尿、頻尿、排尿痛、尿の淋瀝、残尿感などを訴える。
- ③ 夜間頻尿などのため不眠傾向になる。
- ④ 尿管や尿道の圧迫、狭小化による排尿困難。
- ⑤ 腹証では下腹部正中線恥骨上の経穴の曲骨、その外側の横骨、或は曲骨の上の中極とその外側の大赫に圧痛を認め、周辺の腹壁の緊張を認める。

臨床応用

尿路感染症

膀胱炎を中心とした尿路感染症に広く用いられている。急性膀胱炎の場合はあまりに一般的であるためか、まとまった

報告はみられないが、猪苓湯単独もしくは抗菌剤との併用など、様々な用いられ方をしている。散見される報告は難治性膀胱炎に対するものである。陣野原は、療養型の病棟におけるMRSAによる膀胱炎に対し、猪苓湯を投与したところ、尿所見が改善し、MRSAが消失した2例を報告している⁴⁾。その他、在宅自己導尿における尿路感染、反復する女性の膀胱炎に対する報告がある。山田は、猪苓湯に加味、合方した膀胱炎治療の実績について述べている⁵⁾。

腎・尿路結石

猪苓湯には、尿路結石の産生抑制や排出を促進する作用がある。特に、沢瀉には蓚酸カルシウム結石の産生を抑制するデータが示されている⁶⁾。尿路結石に対し猪苓湯を用いた報告は多数あり、さらに石の存在部位や大きさ、併用薬の有無などで様々な検討がされている。

尿路結石の排石についての報告もいくつかみられている。

栗田らは、3ヵ月以上猪苓湯を中心に内服した1,062例を解析した。全般改善度として、797例は自然排石した。結石の部位は腸骨動脈交叉部で上下に分け、大きさは5×5~6×10mmを中結石として、それより大きいものを大結石、小さいものを小結石とした。部位別排石率は、下部尿路結石614例中87.8%、上部尿管結石431例中56.4%と下部の方が有意に効果がみられた。大きさ別排石率では小結石432例で91.9%、中結石453例は72.4%、大結石160例では35.6%で、中結石より小結石は有意に高く、大結石は小・中結石より有意に劣っていた。

年齢別では、10歳代、20歳代は60歳代、70歳代より有意に効果的であったが、30~50歳代では若年層にも高齢層に対しても有意差はなかった。男女差では男性が77.7%、女性が67.9%と有意差がみられ、高齢者でその差が顕著であった。さらに内服開始から3ヵ月以内で、累積で60%以上が排石した。

漢方薬の投与に関しては患者を3群に分け、Ⅰ群は猪苓湯5g単独投与516例、Ⅱ群は猪苓湯5gと芍薬甘草湯5g併用436例、Ⅲ群は痙攣発作時のみ芍薬甘草湯頓服110例とした。各群間の排石率は、3群とも下部尿路結石で有意に排石率が高かった。さらに結石の大きさと石の位置、排石期間について検討したところ、上位結石でも下位結石でも小結石>中結石>大結石の順に排石され、大結石は1年以上内服しても排石されない例が存在した。各群間では基本的にⅠ群で排石率が有意に高く、特に下部の小・中結石では高い有効性がみられた。一方、上部中結石のみⅡ群が若干効果的であった⁷⁾。

また、朝日らは猪苓湯合芍薬甘草湯群とフロプロピオン群で排石効果を検討した。その結果、排石率は漢方治療群において部位別、大きさ別でも早期に排石を認めた⁸⁾。

さらに、ESWL後の排石に対する検討も行われている。高

田らは、74例の猪苓湯投与群と75例の非投与群で石の部位や大きさなどがほぼ同じ2群で比較検討した。その結果、完全排石までの平均日数は猪苓湯群が16.0±2.2日、非投与群が21.5±2.5日と短い傾向を認め、2cm以下の小結石の場合は有意に短縮していたと述べている⁹⁾。

排尿障害

猪苓湯は排尿障害の治療で、尿閉や尿失禁にも用いられる。原因疾患は、脳血管障害や術後等の神経因性膀胱、抗精神病薬の副作用、前立腺肥大などがある。

子宮癌などの婦人科系の手術後に、尿閉や残尿感、尿失禁がみられることがある。松岡らは、広汎性子宮全摘術を施行した15例に猪苓湯合四物湯を投与し、15例の非投与群と排尿量や導尿処置が不要となる自立排尿開始日、尿路系自覚症状の出現を比較検討した。その結果、排尿量は術後10日目と40日以降は両群間に差はみられなかったが、20日目と30日目では投与群が非投与群に比べ有意に増加していた。また自立排尿開始日では、投与群が19.2±6.4日、非投与群が32.9±11.2日と有意に短縮していた。しかし、排尿痛や排尿困難などの自覚症状や膀胱炎などの合併症は発生数が少なく比較検討できなかった¹⁰⁾。この他、子宮全摘術後に残尿感や頻尿を訴え、膀胱炎を繰り返した54歳の患者にやはり猪苓湯合四物湯を投与して、症状が消失した例の報告もある¹¹⁾。

排尿障害は、脳血管障害の後遺症としてもしばしばみられる。若林らは脳血管障害の急性期で、尿道バルーンを抜去後に尿閉をきたした10症例(脳出血6例、脳梗塞4例)に猪苓湯を投与した。その結果、10例中9例で尿閉が改善したが、5例では塩化ベタネコールの投与が必要であった。ただし、意識障害の程度とは関連がなかったと報告している¹²⁾。

また、宮上らの猪苓湯単独の治療報告もある。それによると、対象は無作為に選択された60～82歳の脳血管障害患者11例。脳梗塞6例、脳出血5例で、梗塞は中大脳動脈領域広範2例、基底核部2例、脳幹、前頭葉各1例。脳出血は視床出血が3例、被殻～視床、前頭葉～側頭葉が各1例であり、Modified Rankin Scaleはいずれも5のADL不良群であった。脳血管障害発症34日以内に、バルーン抜去後6～8時間以上自尿をみない患者に猪苓湯7.5gを単独で2週間投与した。投与開始から8日以内に自尿が確認でき、有効と判断したものが9例であった。無効の2例はいずれも中大脳動脈領域の脳梗塞で、視床・基底核部の脳血管障害による尿閉は有効例が多かったと報告している¹³⁾。

この他、術後乏尿で不安や不眠の訴えのあった2例の報告¹⁴⁾や、前立腺肥大症で排尿時間延長や残尿感等を改善した報告もある¹⁵⁾。

下部尿路症状(LUTS)

近年注目されてきている概念である下部尿路症状(LUTS: Lower Urinary Tract Syndrome)にも用いられる。

関口らの報告によれば、猪苓湯は特に膀胱痛症候群に用いられる¹⁶⁾。また、LUTSの概念が確立する以前の報告もいくつかみられる。菅谷らは、検尿所見や膀胱超音波にて診断した尿道症候群の患者71例に対し、猪苓湯及び猪苓湯合四物湯を4週間投与して治療効果を検討した。その結果、有効度は猪苓湯で有用以上23例(68%)、やや有用以上28例(82%)、猪苓湯合四物湯では有用以上20例(54%)、やや有用以上26例(70%)であった¹⁷⁾。

堀井らも、尿所見陰性で頻尿、排尿痛を訴える30例に、猪苓湯と猪苓湯合四物湯を投与した。総合評価における有効率は、猪苓湯で76%であり、特に頻尿に対して効果的であった。また、猪苓湯合四物湯は80%であった¹⁸⁾。

この他頻尿や排尿困難、慢性前立腺炎、急性膀胱炎で抗生剤の治療後で、尿検査結果が正常であっても、LUTSを訴える患者に用いることがある。

その他

子宮内膜症などの婦人科疾患に用いた症例報告が散見される。さらに、皮膚科疾患にも清熱利水作用を期待し用いられている。湿潤傾向のある皮膚炎を目標に、アトピー性皮膚炎や陰部癢痒感などに応用されている。

島村らは、10例の血精液症に対し、4週間猪苓湯を投与したところ、著効7例、有効1例、やや有効1例、無効1例であったと報告している¹⁹⁾。また山本らは、特発性浮腫の患者においては、血漿レニン・アンジオテンシン・アルドステロン値の比較的高値が観察されるが、5例の患者に猪苓湯を1ヵ月投与した結果、浮腫の軽快とホルモン値の有意な低下を観察したと述べている²⁰⁾。

疼痛性疾患にも応用した報告もみられる。背部痛に対する報告はいくつかみられるが、新井のものが詳しい。それによれば肩甲骨間部の激しい疼痛と頸部の凝りを訴える62歳の女性に、残尿感や夜間尿、顕微鏡的血尿を目標に猪苓湯を投与したところ、泌尿器科的症状が消失したのみならず、痛みや凝りも消失したと報告している²¹⁾。

この他、入江は生理中に下痢して尿量が減少することを目標に猪苓湯を投与したところ、偏頭痛が改善した一例²²⁾を、古賀は尿量が減少し濃い色であることを目標に舌痛症に猪苓湯を用いて軽快した一例²³⁾を報告している。

<引用文献>

- 1) 矢数道明 漢方処方解説 p429-434. 創元社 大阪.
- 2) 小倉重成 五苓散と猪苓湯 日東医誌 7(1): p35, 1956.
- 3) 中田敬吾 猪苓湯 漢方研究 327: p76-81, 1999.
- 4) 陣野原康治 猪苓湯が生体内環境を修復することによりMRSAの除菌効果を現したと思われる2症例 漢方研究 446: p46-49, 2009.
- 5) 山田光胤 膀胱炎に種々な猪苓湯加味・合方 漢方の臨床 12(10): p569-571, 1965.
- 6) 吉岡俊昭ほか 沢瀉及び猪苓湯の結石形成予防作用 JAMA(日本語版)別冊付録 p46-47, 1997.
- 7) 栗田孝ほか ツムラ猪苓湯の尿管結石排出に及ぼす効果の検討 泌尿紀要 27(7): p801-813, 1981.
- 8) 朝日俊彦ほか 尿路結石に関する臨床統計的観察 西日泌尿 43(3): p631-635, 1981.
- 9) 高田昌彦ほか ESWL後の排石に対する猪苓湯の効果 泌尿紀要 43(4): p311-314, 1997.
- 10) 松岡正造ほか 広汎性子宮全摘術後の排尿障害に対する猪苓湯合四物湯の有効性の検討 産婦人科漢方研究の歩み X VII: p84-86, 2000.
- 11) 田中哲二 子宮癌根治手術後に持続する頻尿・残尿感に猪苓湯合四物湯が著効した1症例 漢方医学 27(5): p215, 2003.
- 12) 若林礼浩ほか 脳卒中尿閉に対する猪苓湯の効果 漢方医学 29(6): p270-272, 2005.
- 13) 宮上光祐ほか 脳血管障害による神経因性膀胱の尿閉の治療(第2報) 第18回日本脳神経外科漢方医学学会学術集会講演記録集 p39-44, 2010.
- 14) 小川幸夫ほか 猪苓湯による術後乏尿の治療例について 日東医誌 7(1): p15, 1956.
- 15) 酒本譲ほか 八味地黄丸及び猪苓湯の前立腺肥大症に対する効果の検討 第13回泌尿器科漢方研究会講演集 3: p7-14, 1996.
- 16) 関口由紀ほか 女性泌尿器外来におけるLUTS 100例の漢方薬処方検討 第24回泌尿器科漢方研究会学術集会講演要旨集 p2, 2006.
- 17) 菅谷公男ほか 尿道症候群に対するツムラ猪苓湯とツムラ猪苓湯合四物湯の効果 泌尿紀要 38(6): p731-735, 1992.
- 18) 堀井明範ほか 尿路不定愁訴に対する猪苓湯、猪苓湯合四物湯の効果 泌尿紀要 34(12): p2337-2241, 1986.
- 19) 島村正喜ほか 血精液症に対する猪苓湯の使用経験 石川県立中央病院医学誌 19(1): p17-19, 1997.
- 20) 山本昌弘ほか 特発性浮腫患者のレニン・アンジオテンシン・アルドステロン系に及ぼす猪苓湯エキスの影響 Proc.Symp.WAKAN-YAKU 15: p146-149, 1982.
- 21) 新井信 猪苓湯が背部痛と頸部の凝りに有効であった1例 漢方の臨床 42(5): p538-542, 1995.
- 22) 入江祥史 猪苓湯が奏効した偏頭痛の一例 漢方医学 28(3): p134, 2004.
- 23) 古賀実芳 舌痛症の経過中に猪苓湯が奏効した1例 伝統医学 11(1): p26-29, 2008.